

## 白居易『香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す』報告：花岡風子

今回のお題は白居易の名作『香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す』でした。清少納言の『枕草子』に、この詩を暗示した有名な一節があるためか、日本人には特に親しみ深い詩です。

出典は『白氏文集』。これは、中唐の詩人白居易が74歳の時に、自撰によって完成させたもので、全75巻（現存するのは71巻）もある大著です。白居易はこの翌年の846年に亡くなっていますが、生存中すでに、遣唐使によって日本に自分の詩が伝わり、愛読されていることを知っていたそうです。

白居易は字を楽天と言ひ、白楽天とも言われますね。2018年の2月に公開された『空海』という映画の中で、若き日の楽天と空海という二人の天才が、生き生きと描かれていたのが印象に残っています。但しこれが史実に基づくものかどうかについては疑問があるそうです。

白楽天は李白の没後10年後の772年に地方官の家に生まれています。映画の中でも、李白や楊貴妃の全盛期と、その頃のことを文献で調べるシーンが出てきます。楽天と空海の交友が史実かどうかは別として、二人が同一時期に長安にいたことだけは確かなようです。

楽天は貴族の出身ではなく、今でいう地方公務員の家にも生まれました。幼い頃から非常に優秀で、5、6歳で既に詩を書いていたそう

です。安祿山の乱後の混乱期に、各地を転々とせざるを得ない時期があり、同年配の仲間たちとはやや遅めの、29歳の年に科擧の試験に合格し、役人の世界に入ります。しかし、自己の信条や政治への批判を詩に書いて「新樂府」と称し、音楽に乗せて広めようとしたので、宦官たちに嫌われます。

30代後半で「左拾遺」という、地位は低いものの、皇帝に直言する役目の職に就きますが、母親の喪に服するために、3年間故郷に戻っている間に職を外されしてしまいます。それでもめげずに自分の意見を言い続けたために、とうとう左遷されてしまいます。

しかしその後、中央に呼び戻されるも、権力闘争に明け暮れる中央官界に愛想をつかし、自ら地方官を志願することもありましたが、その後、71歳で引退するまで長安や洛陽で役人生活を続けました。

『香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁（香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す）』というこの詩は、白居易が江州（今の江西省九江）に左遷され、司馬という官職に任命されたときに詠んだものです。格調高い、七言律詩で平仄もきちんと規則通りに整えられた完璧な構成になっています。香炉峰とは廬山の山中にある山峰の一つです。白居易はこの麓に寓居を定めていました。「草堂」とは成都にある杜甫の草堂にちなんで名付けたものです。「卜」とは方位を占って住まいを

定めることです。「題東壁」とは東側の壁に自作の詩を書きつけた、ということです。

Xiāng lú fēng xià xīn bù shān jū cǎo táng chū chéng ǒu tí dōng bì  
香炉峰下新卜山居草堂初成偶题东壁

bái jū yì  
白居易

rì gāo shuì zú yóu yōng qǐ  
日高睡足犹慵起  
xiǎo gé chóng qīn bú pà hán  
小阁重衾不怕寒  
yí ài sì zhōng qī zhěn tīng  
遗爱寺钟敲枕听  
xiāng lú fēng xuě bō lián kàn  
香炉峰雪拨帘看  
kuāng lú biàn shì táo míng dì  
匡庐便是逃名地  
sī mǎ réng wéi sòng lǎo guān  
司马仍为送老官  
xīn tài shēn níng shì guī chù  
心泰身宁是归处  
gù xiāng hé dú zài cháng ān  
故乡何独在长安

こう ろう ほう か あら さんきよ ぼく  
「香炉峰下新たに山居を卜し  
僧堂初めて成り東壁に題す」

ひ たか ねむり た な お ものう  
日高く睡足りて猶お起くるに慵し  
しょうかくきん かさ かん おそ  
小閣衾を重ねて寒を怕れず  
い あい じ そぼだ  
遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴き  
こう ろう ほう ゆき すだれ かか  
香炉峰の雪は簾を撥げて看る  
きやう ろ すなは な のが ち  
匡簾は便ち是れ名を逃るるの地  
し ば な ろう おく かん  
司馬は仍お老を送るの官  
こころゆたか み やす こ き  
心泰に身寧きは是れ帰する処  
なん ひと あ  
故郷何ぞ独り長安に在らん

この詩の中の「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴き、香炉峰の雪は簾を撥げて看る」という一句がことさら日本では有名です。

『枕草子』の中にこのような場面が出てきます。藤原定子という中宮の位にあった女性に

仕えていた清少納言が、定子を囲むサロンで、定子に「清少納言や、香炉峰の雪はどうなっているでしょうね？」と聞かれ、とっさに御簾を上げて、目の前の山を香炉峰に見立てて見せたことで、定子を満足させた、というくだりです。

この清少納言の機転に、まわりの女官たちは「この詩は誰でも知っていて、歌にまで読み込んだりするけれど、とっさにあんな事が出来るなんて、あなたはやはりこの宮さまに仕えるのに相応しい方ですね」と賞賛したと、書いています。「まあ、自慢話ですよ。しかし、この話が示すように、平安時代は男女を問わず、漢詩を一字一句違わず覚えるのがインテリである証だったのですね。また、平安時代の日本の宮中では李白や杜甫より白居易の方が人気があったということも分かりますね」と植田先生。

『白氏文集』は、白居易存命中に日本に伝わり、平安文学に多大な影響を与えました、『白氏文集』で白居易は自らの詩を「風諭」（社会批判）「閑適」「感傷」の三種に分類していますが、日本では「閑適」、「感傷」の詩が特に好まれ、菅原道真の漢詩は白居易と比較されたりしています。また、『源氏物語』の作者紫式部は、藤原道長の娘で後に中宮となった彰子に、和歌や漢文の教授をするほどの教養の持ち主でしたが、その『源氏物語』も白居易の長恨歌から影響を受けているそうです。

さて、この律詩の出だしでは、白居易の悠々とした生活ぶりが伺えますが、実際のところ、司馬という官職は今でいう軍関係の副官級で、位は高かったものの、実際は何もやることは

なかったのです。ある意味、左遷させられ、干されていたような日々でした。優雅さの裏側には、「慵」の一字が示すように、何となく心のモヤモヤが感じられます。

後半は、左遷地で、司馬という職に当たっているのは、余生を送るには丁度良い、身も心も安らかにいられる、と言っているのは、陶淵明に憧れていた白居易の正直な気持ちの一端であることは間違い有りません。

植田先生の解説は続きます。「しかし、最後の一句、故郷は長安だけじゃないぞ、というのは、東京だけが都じゃないぞ、と言ってるようなもので、半分中央で活躍出来ないことへの悔しさが滲み出ているように思いますね。その後、実際、白居易はまた長安に帰って活躍してますからね。第一線で詩人として政治家として活躍したいと言う気持ちと、中央で意に添わない生活を送るくらいなら、隠遁生活もいいなあ、という気持ち、どっちも嘘ではないんですね。まあ、悪く言えば中途半端。しかも、この人は大の女性好きでね。妓女たちにはモテモテ。おまけに側仕えの女性をとっかえひっかえしたりなんかして……。杜甫のように真面目一筋、妻一筋という性格でもなかったみたいですよ。とって李白のように奔放不羈にも徹しきれない。まあ、男もいろいろですよ」。

先生の解説に、一同から笑い声が上がりました。こういう話があるからこそ、作者に親しみがわき、あれこれ想像を膨らませたぶん、作品もより印象に残ります。

白居易の詩は言葉が易しいことでも人気があったようです。当時の老婆や妓女たちにも

わかる言葉を選んで詩を作ったとも伝えられています。それなりに心も優しかったのでしょうかね。

それはそれとして、白居易のどっちつかず、都会も田舎も捨て難いという気持ち、個人的にはすごく理解できます。私自身も両方とも必要なタイプだからです。刺激的な大都会も、心安らぐ田舎もどちらもバランス良く味わいたいというのが正直な私の欲求です。週4日ハイヒールを履いたら、あとの3日は長靴で土いじりも好きというのが私です。歴史上の偉人に対し、いささか失礼ではありますが、「都会で活躍と田舎で自適、どっちも好き」という白居易の気持ち、非常に分かる！ と思いました。

それに色気あるモテモテ男子ならなおのこと、陶淵明のように生涯地方に埋もれるのはちょっと無理だったのではないのでしょうか。白居易は音楽も得意で琵琶の名手、他に色々な楽器も出来たそうです。新樂府というジャンルを打ち出し、自己の信条や政治批判を詩に書くだけでなく、一方では自作の詩を妓女達に音楽に乗せて歌わせる、ということもさかんにやっていたわけですから……。今で言う人気の作詞家や演奏家の一面もあり、都会の女性達にはスター的存在でもあったのではないかと思われれます。そんな白居易が陶淵明に憧れるのは、やはり陶淵明のような世捨て人の境地にはなりきれないからではないのでしょうか？ しかし、野心もあつたからこそ、75歳という当時では非常に高齢で亡くなる前の年まで、75巻もの自身の作品集を完成することが出来たのだと個人的には思います。全く

の純粹、無欲では、ここまで出来ないでしょう。

しかしそのような白居易も、最後は仏門に入ります。晩年は龍門の香山寺に住み、「香山居士」と号したそうですが、役人生活の後半に至って仏門に近づいたのも、権力や女性などに対する煩悩を断ち切れなかったからでは？と思うと、この早熟の天才詩人も人間臭い身近な存在に感じられます。

さて、全員で順番に朗読練習をしたあと、メンバーの一人から、この時代の枕はどんな形をしていたのか？もしかしたら、枕をそぼだ敬てて聞くとするのは、筒状になった枕が音を反響して鐘の音がよく聞こえるのではないか？という質問があり、一同で盛り上がりました。調べてみると、当時は陶器や木の硬い枕をしていたようなので、実際白居易がどんな枕をしていたかは分からないものの、筒状の陶器の枕で、鐘の音が反響したのではないかという想像もあり得ないわけでもない、と思いました。

いずれにしても、耳を敬てるのではなく、枕を敬てるという表現にはいくつかの論争があるようです。

さて、どっちつかずで女好きの天才詩人白

居易のことを私は人間らしいと感じましたが、一方、平安朝きっての才女であった清少納言と紫式部が、直接の面識はなかったものの、互いに反目しあっていて、紫式部は清少納言を「嫌な女だ」と酷評していることもまた、現代でもいかにもありそうな、人間らしくて面白いエピソードですね。

それにしても、男性しかまともな学問ができなかった時代に、唐という外国から来た文章を読みこなし、講義までできる教養と、それを独自の文章で素敵に表現する能力をもっていた清少納言と紫式部は、私にとっては、中国語と日本語の女神様みたいな存在です。対照的な性格の違いだったことも興味深いですね。私は自らが仕えるていし定子が悲劇的な運命を辿るのに、彼女の人生の影の部分は一切触れず、明るい面だけを書ききった清少納言の決意ある行動も好感を持てるし、「あなた、底が浅いわね。そんなもんじゃないわよ」と言いたい紫式部の心情も分かる気がします。いずれにしても『枕草子』と『源氏物語』は本当に日本の宝ですね。文章を書くのに四苦八苦するアラフォー女子には、あこがれの女神たちです。